



Ecola

イ・コ・ラ

No.16
発行 2012年4月22日

こんにちは！

長かった冬がやっと去り、新緑の風がさわやかに感じられる季節となりました。新年度が始まり、少しだけ環境が変わった人、大きく変わった人、少しも変わらなかった人も、皆さんそれぞれ、楽しく過ごされているでしょうか？

半年に一回、発行しているイコラですが、毎回、半年間のイベントなどの写真を眺めながら、「いろんなことがあったなあ」と改めて思い出します。「そう言えば、こんなこともあったんだあ！」という再発見もうれしい作業です。皆さんは、ほんの数ヶ月前のできごとなのに、時々ずっと遠い記憶になっていたりしませんか？ 写真の子どもたちの笑顔が、日々のできごとに埋没気味の私たちに、“楽しさ”を思い出させてくれますよ(^_^)

療育キャンプ

平成 23 年 11 月 12 日(土)～13 日(日)
田辺市、白浜町にて

初日は、プレジール(田辺市)にて、まずオリエンテーションがありました。

ボランティアの熊野高校野球部の生徒さんと対面し、サポートブック(子



どもの特性や接し方を書いたもの)を読んでもらった後、子どもは温水プールで一緒に遊んでもらいました。

その間、保護者は、和歌山大学教育学部附属特別支援学校教諭岡 潔先生による研修会「特別支援学校での 12 年間は自閉症生徒

Aをどこまで指導できたのか～得意なことを活かして～」に参加しました。

特別支援学校での12年間の教育は指導が一貫されていたのか、教育の成果としてもたらしたものは何か、自閉症の特性に応じた支援は継続されていたのかについて、一人の生徒の事例から検証していました。各学部での取り組みや指導の経過も詳しく紹介されていて、とても興味深い内容でした。



その後、宿泊先のベイリリィしらゆり荘(白浜町)へ移動し、夕食は団体貸切の食堂でゆっくりと美味しいお料理をいただき、温泉(天然かけ流し温泉!)に入りました。母子で参加の男の子には、男性スタッフが入浴介助をしてくれました。

夜には、岡先生とポラリスセンター長 辻幸代先生による個別療育相談が行われました。

また、子どもが寝た後は、お楽しみの保護者懇親会もありました。

二日目は、田辺市立三栖幼稚園へ移動し、乗馬体験をしました。

乗馬日和のいいお天気の下、子どもたちからお母さんまで、ポニーに乗りました。



子どもたちは最初緊張気味でしたが、だんだん余裕が出てくると、笑顔で両手

を離して、上手にバランスをとって乗ったりもしていました。

お礼のエサやりでは、ニンジンやリンゴをおそろおそろ差し出して、ポニーが食べる前に手を離してしまう子もいましたが、スタッフに手伝ってもらっ

て、なんとか無事に食べさせることができました。

最後にみんなで記念撮影して、解散となりました。

家族や友達と楽しめて、研修も受けられて、専門家に相談にも乗ってもらえる、三拍子そろった超お得な療育キャンプです。興味のある方は次回ぜひご参加くださいね！



ボウリング大会

平成 24 年 2 月 26 日 (日)

和歌山グランドボウル 参加者 40 名

今年度より、3月のつながり文化祭へのバザー参加をやめたので、寒いこの時期にボウリング大会を開催することになりました。和歌山グランドボウルは支援学校の行事で利用されることもあり、「こなら大丈夫」と参加してくれた方もいました。

外はとても寒かったですが、みんなゲームに熱くなり、2ゲームを終わる頃にはホカホカしていました。運動不足解消になったかな？



日浦佑真くんのお母さんより、感想をいただいています。



毎年、楽しみにしている行事の一つです。でも、自分の思い通りにボールがピンを倒せなくて、すぐに怒ってしまいます。勝負に関係なく、楽しく過ごせるようにと、毎回話しているのですが、負けるのが嫌なので、始まると忘れてしまっています。うまくできなくても、「次がんばればいい」と思えるようになってほしいと思っています。

2月26日にボウリングをしました。
 ぼくは、第1レーンで、森おか大ナケ君と
 大ナケ君のお父さんの3人でしました。
 ぼくは、3番目に投げました。思う
 ようにピンがたおれなくて悲しかったです。
 でも、1回だけストライクをとりました。
 みんながハイハイして喜んでくれました。
 とてもうれしかったです。
 今回は、いい点数ではなかつたけど、
 来年は、がんばりたいです。

日浦佑真くん(地域の支援学級小5)が
 感想を寄せてくれました。

お母さんの交流会

第3回 平成23年12月8日(木) 参加者15名

(会員9名 一般6名)

中央コミュニティセンターにて

研修担当 辻内眞弓

2年前に幼児～高校生のお子さんを持つお母さん達の交流会をスタートさせました。

発端のきっかけは、今まで年に1～2回、別の内容でお母さん達が集まる事があり、集まれば話題は、学校でのありとあらゆる心配や悩み事、子どもの友達関係、放課後の事、問題行動など、話は子どもの事で尽きませんでした。それならもっと回数を増やし、お母さん達が話をしたり聞いたりすることで、お互いに情報交換や子育てのアイデア交換が出来る機会を作ろうという事になり、今の交流会に至っております。

この会は会員さんだけではなく、一般のお母さんの参加も受け入れております。

「自閉症協会」を知らないお母さん達がこの会を通じて協会の事を知って頂く窓口となれば...と思ったからです。この会を通じて新会員さんも増え、今後の活動の力に加わって頂けた事は大変嬉しく思っています。



お母さんの交流会では、様々な悩み事、子どもの問題行動、また逆に以前出来なかった事ができるようになった成長への喜びの報告など、本当に様々な内容の話で盛り沢山です。中でも、お母さん達ならではの役立つ情報(習い事、放課後の過ごし方、病院、歯医者者の情報、子どもの美容院、外食etc...)が満載で、実体験をもとに情報交換が出来るのですぐに役立つ情報ばかりです。

そんな中、一般参加のお母さんに多く感じる事は、会員さん達が通って来た子育ての悩みの入り口で、まだ心を痛めて悩まれているお母さんが多いなあという事です。お母さん自身、心のどこかで子どもの障害を認めたくない、出来る事なら何とかごまかしながらも健常の子ども達と同じように支援を受けずに学校生活を送り、そのまま大人になっていけないものだろうかという考えを持っているように思います。でもその一方でそのお母さん自身が「このまま障害を明らかにせずに適切な支援を受けないままで本当に良いのだろうか.....」という不安でご自身の矛盾した考えと闘っているように見えます。

会員のお母さん達も、悩みの内容に多少の違いはあれども、同じようにお子さんの事で悩んで来た方達ばかりだと思います。みなさんも同じ道を通って来られたと思います。でも子どもが小学校に上がり学年も進んで行くと、支援を受けないままでは何ともならないことをご自身が感じ、体験されたと思います。色々な葛藤の中で、自分も変わらなければ子どもも良い方向へ変わらないことを実体験で思い知らされ、次のステージへ親子で前進するしかない、子育ての中で覚悟を決めて行くのだと思います。

たくさん泣いて悩んで今があるからこそそのアドバイスや失敗例の引き出しを、お母さん達はご自身の体験からたくさん持っているのだと思います。私も先輩お母さん達に辛くて重かった心を軽くしてもらった一人なのです。

今後の会でも、現在不安でどうしたらいいのか、親子で進む道もわからないお母さん達が参加されてくると思います。そんな時には、泣いてばかりいた当時の自分の気持ちを思い出し、心細いお母さんに寄り添って励ましてあげたいと思います。

会員のお母さん達は、今後交流会で話し合いたい内容などありましたら、いつでも気軽に提案して下さいと思います。また、まだ一度も交流会に参加されていないお母さん達も、是非いつでも待っていますので、気軽にご参加ください。

これからもみなさんどうぞよろしくお願い致します。

全国「かまぼこ板の絵」展覧会

田辺絵画教室から、全国「かまぼこ板の絵」展覧会に出展しました！



人権フェスタ

11月19(土)・20(日) 和歌山ビッグホエールにて

ブースの壁に、田辺絵画教室で作成した子どもたちの作品などをたくさん展示しました。

1日目は、嵐のような天気で、みんなが楽しみにしていた戸外の食べ物模擬店街のテントが吹き飛ばされたりなど、てんやわんやでした。さすがに人出も少なく、残念でしたが、2日目は盛況でした(^_^)

ブースに展示した子どもたちの絵



岡先生のワンポイントアドバイス

～自閉症者とその家族をサポートする人たち～

附属特別支援学校 岡 潔

もう8年前になりますが、「発達障害者支援法」が制定され、これまで制度の谷間となっていた自閉症をはじめとする発達障害のある人とその家族へのライフステージに応じた支援体制の整備が初めて法律に書き込まれました。この法律が何をもたらしたのかは言うまでもなく、和歌山県においても発達障害者支援センターポラリスを平成17年に誕生させました。ポラリスを要にサポート体制は大きく広がるかと思われました。でも、現実的には県下の専門家の数がニーズに比べて少なく、診断は受けたけれどその後の支援がないという苦情を聞くことや、ニーズへの対応が遅れているといったご指摘をいただくこともあります。

和歌山県自閉症協会においても「自閉症の支援者育成事業」を展開してきました。平成22年に和歌山県で開催した全国大会でも「自閉症に携わる専門家の養成と支援者の支援体制の確立」はスローガンの一つに掲げており、専門家の役割を県下に発信してきました。これらの歩みは全く実を結んでいないのでしょうか。いや、そうではありません。

和歌山県においても、自閉症を診断できる病院（医師）はありますし、大学等（学識経験者）もあります。求めれば早期療育を始められる訓練機関（PT、OT、ST等）や相談機関（保健師、発達相談員、ソーシャルワーカー等）があります。各福祉圏域には、通園施設（保育士）もあり、児童デイサービスを受けられる施設や事業所（生活支援員）も増えて来ています。成人になっても、作業所や福祉施設では献身的な職員さんが支えてくれていますし、一般就労しても障害者職業センター（カウンセラー、ジョブコーチ）や障害者就業・生活支援センターがサポートしています。

親は専門家ではありませんが、協会では、自閉症のある子どもの親による親のための支援・相談員として活躍するペアレント・メンターの養成を行っています。本県では研修を受けたメンターがまだ6人しかいませんが、同じ親でしかできない支援もありますから今後メンターの数が各地で増えていくことが期待されるところです。

自閉症者の人生を左右するのはやはり学齢期と言っても過言ではないと思います。学校で学んだこと、体験したことは良きにつけ悪きにつけあまりにも後の生活に影響が大きいからです。最近では、特別支援教育の推進とともに、小・中学校には特別支援コーディネーターが100%指名されていますし、自閉症・情緒障害特別支援学級の配置や通級指導教室の増設など体制整備も進んでいます。より専門性を求めて特別支援学校を選ぶ傾向も強く、県下の支援学校はマンモス化しつつあるのが現状です。「支援」とは、主体があくまでも支援される対象者側（本人とその家族）にあり、そのニーズに基づいて支えていくものなのだと思います。このことは特別支援教育でも同じです。そう考えると学齢期のポイントは、やはり実態を把握し適切な支援ができる教師の専門性に尽きるのではないのでしょうか。

私は、15年前にTEACCHプログラムを研修した際にジェネラリストモデルという視点を学びました。それぞれの専門だけではなく、医療、教育、福祉、就労支援など総合的に把握しなければライフステージのあらゆる面において自閉症の支援はできないという点に共感し、それゆえに自己研鑽に励んできました。ところが、学校には、スポーツが優れている教師、楽器が上手な教師、教材づくりに長けている教師、パソコンが得意な教

師、子どもをひきつけるパフォーマンスに優れている教師などなどいろいろな人がいます。教師全員がジェネラリストにならなくても何か一つのスペシャリストがいて、それぞれのスペシャリストが得意分野を活かし協力すれば、チームとして大きな力になるのではと考えるようにもなりました。勿論そこには自閉症理解というベースが必要ですけどね。

専門家は待っていてもヒーローのように現われません。どの機関でも世代交代はやってきますので後継者を育成していくことも重要な課題です。各地、各機関で蒔いた種が育ち、点ではなく線、さらには輪になって支援がつながっていかねばなりません。いつの時代になっても自閉症のある人とその家族を支えていくには、専門家相互の連携とネットワークでの支援が必要不可欠です。

和歌山県との対話集会 & 和歌山市との対話集会

和歌山県との対話集会は、11月25日(金)、県子ども・女性・障害者相談センターにて開催されました。



和歌山市との対話集会は、11月15日(火)、和歌山市役所にて開催されました。

対話集会は、毎年1回、県および市の障害福祉課を中心とした教育、商工労働など関係各課の方々と当協会会員が集い、要望や現状などについて話し合いを行う会合です。

上の写真は、どちらも「市との対話集会」の様です。

事務局から

今年度は、一部役員が改選され、事務局がリニューアルされます。新しい取り組みも考えていきたいと思っておりますので、皆さん、どんどんご参加下さい。

伊勢家富士雄

編集後記： 編集作業では、文章作りが苦手なスタッフたちが一文一文に悪戦苦闘しつつ、お菓子をつまみつつ、進めています。たくさんの写真を見ながら、つい「あの時はああだった。こうだった。」という話に陥り、時間がなくなってしまうのが常ですが・・・(^_^;)

編集スタッフ：尾崎富久子・江川かがり・藤原昌子・植野比呂美

《発行》イコラ編集局(連絡先)植野比呂美

e-mail:h.ueno@poole.ac.jp

イコラはWeb版も出しています。ぜひカラーでもお楽しみ下さい。バックナンバーもご覧いただけます。和歌山県自閉症協会ホームページからどうぞ!!